

茨城県に発生した主要な樹木害虫と防除

1. はじめに

茨城県林業試験場では、県内各地から鑑定を依頼された病害虫を、1972年から記録している。資料はぼう大であるが、樹木に被害を与えるほどの害虫は、既に類型化され、それらは意外に少ない。毎年新害虫がいくつか増えるものの、20年間の害虫を把握すれば、90%以上の害虫は網羅できる。そこで資料を整理し、本文にまとめてみたが、これが樹木害虫の簡便な手引きとなれば幸いである。なお、薬剤の希釈倍率は、一般的な市販薬を基準として記したが、商品によって異なるので、使用に際しては各薬剤に記された使用基準を遵守されたい。

2. 食葉性害虫

(1) 鱗翅目

幼虫—いわゆる毛虫—が、葉を食害する。この害虫で枯れる木は少ない。防除は、幼虫の発生期に、ディブテックス乳剤、スミチオン乳剤などの500~1,000倍液を散布する。

ミノガ科：オオミノガ、チャミノガなどのミノムシである。雑食性で、カエデ類、サクラ、ウメ、モッコクなどにしばしば発生した。

ハモグリガ科：いわゆるハモグリである。この害虫の種名の同定は難しい。本県では、シイ類、シャリンバイなどに発生した。

スガ科：マユミシロスガが、マユミ、ニジキギを食害し、糸を張る。

キバガ科：イブキチビキバガによる枝枯れが、カイズカイブキ、ビャクシン、シノブヒバに発生した。

ハマキガ科：モッコクハマキなどのいわゆるハマキガが、モッコク、イヌエンジュ、ケヤキなどに発生した。

マダラガ科：タケ類にタケノホソクロバが発生した。ヒサカキ林約8haには、ホタルガが異常発生した。

シャクガ科：ユウマダラエダシャク、マエキオエダシャクなどのいわゆるシャクトリムシが、マサキ、イヌツゲ、コナラ、ケヤキに発生した。

カレハガ科：マツカレハが、県内一円のマツ類やヒマラヤスギに恒常的に発生した。ヤマダカレハが、県中央部のコナラ林に大発生した。

ドクガ科：スギドクガがスギ、ヒノキ、ヒマラヤスギ、イブキに、チャドクガがツバキ、サザンカに、キアシドクガがミズキに発生した。マイマイガがコナラ、クリ等の広葉樹に、ハラアカマイマイガがモミに、ウチジロマイマイガがヒノキ、サワラ、イブキに発生した。

シャチホコガ科：セグロシャチホコがセイヨウハコ

ヤナギ（通称ポプラ）、ヤナギに、モンクロシャチホコがサクラ、ウメに、オオトビモンシャチホコがコナラに、クビワシャチホコがギンカエデに発生した。

ヒトリガ科：雑食性のアメリカシロヒトリが、各地の公園、街路樹の広葉樹に発生した。サラサヒトリがコナラに発生した。

イボタガ科：イボタガがモクセイに発生した。

ヤマユガ科：雑食性のクスサンが、クスノキ、トチノキ、クリ、サクラ等の広葉樹に発生した。

(2) 甲虫目

成虫が飛来し、葉を食害する。防除は、成虫の食害期に、スミチオン乳剤の500~1,000倍液を散布する。

コガネムシ科：ヒメコガネがチャボヒバ、ヒメリンゴを食害した。

タマムシ科：ヤノナミガタチビタマムシが、ケヤキを食害し、早期落葉が認められた。

ハムシ科：ハンノキハムシがハンノキ類やダケカンバを、サンゴジュハムシがサンゴジュを食害した。

ゾウムシ科：ケヤキを食害するアカアシノミゾウムシは、県内一円に恒常的に発生したが、たとえひどい食害を受けても、枯損木は発生しなかった。エノキノミゾウムシがエノキを、カシワノミゾウムシがカシワを、コフキゾウムシがイギを食害した。

(3) 膜翅目

幼虫—毛のない毛虫—が、葉を食害する。防除は、幼虫発生期に、スミチオン乳剤、DDVP乳剤などの1,000倍液またはそれらの粉剤を散布する。

マツハバチ科：マツノクロホシハバチが、100ha以上のアカマツ林で異常発生したが、防除しなくても4年以内に終息した。マツノミドリハバチが、アカマツ、クロマツ、ストロブマツ、カラマツ、ヒマラヤスギに発生した。

3. 穿孔性害虫

幹、枝に穿孔する虫の殺虫は難しい。防除は、産卵期または穿入期直前に、スミチオン乳剤の100~200倍液を、地上から約2mの高さまで予防散布するのが効果的である。また、産卵や虫の穿入を受けないよう、樹勢を健全に保つことも重要である。

(1) 鱗翅目

コウモリガ科：コウモリガが、キリなどの広葉樹と、ヒノキ、スギの幼齢木を加害した。5月および6月に2回行う予防散布が効果的である。さらに下草刈りを行うと、効果は一層高まる。

スカシバガ科：コスカシバが、サクラを恒常的に加害した。6~9月の毎月1回行う予防散布が効果的である。

(2) 甲虫目

防除のため6月および7月の2回、毎年予防散布を行えば、ほとんどの甲虫の加害は予防できる。

タマムシ科：ウバタマムシが、マツの衰弱木を加害した。

カミキリムシ科：センノカミキリがタラノキを、ゴマダラカミキリがカエデ類、エゴノキ、シラカンバなどの広葉樹を、シロスジカミキリがシイ類、カシ類、ケヤキなどの広葉樹を、ムナクボサビカミキリが山火事に被災したマツ類を、ヒゲナガカミキリがモミ老齡樹を、スギカミキリがスギ、ヒノキを、ヒメスギカミキリがスギ、ヒノキ、ネズコ、イブキを加害した。スギカミキリは、3～4月の予防散布がよい。

ゾウムシ科：マツキボシゾウムシが、クロマツの3年生苗木とヒマラヤスギの苗木を加害した。

オオゾウムシ科：オオゾウムシが、山火事に被災したマツ、スギ、ヒノキを加害した。

キクイムシ科：マツノキクイムシが、マツの枝条部を加害した。カシワノキクイムシがトウカエデの苗木を、シイノキクイムシがゲッケイジュを加害した。

4. 吸汁性害虫

吸汁性害虫はたとえ大発生しても、多くの場合枯れるほどの被害は少ない。この害虫の種名同定は、難しいものが多い。

(1) クモ網ダニ目

ハダニ科：夏季に干ばつの年に、スギハダニがしばしば広域に異常発生した。トドマツハダニがマツ類、ヒバ、ビャクシンに、タケスゴモリハダニがササ類に発生した。防除は、アカルなどの殺ダニ剤の散布が効果的だが、降雨や散水も非常に有効である。

(2) 半翅目

ゲンバウムシ科：クスゲンバウムシがクスに、ツツゲンバウムシがツツジとサツキに発生した。多量の発生を認めたら、防除のためスミチオン乳剤、DDVP乳剤などの1,000倍液を、5～6月に散布する。

キジラミ科：トベラキジラミがトベラに、クストガリキジラミがクスに、キジラミ類がイチョウ、ミズキに発生した。防除は、マラソン乳剤、DDVP乳剤などの1,000倍液を、4～5月ごろ2～3回散布する。

カサアブラムシ科：マツノカサアブラムシが、五葉松類とクロマツに発生し、多量の発生の際、枝枯れや枯死木が認められた。防除は、5月ごろのふ化幼虫をねらい、カルホス乳剤、スプラサイド乳剤の500～1,000倍液を散布する。

アブラムシ科：ムギワラギクオマルアブラムシがウメに、ヤノイスアブラムシがイスノキに、サルスベリヒゲマダラアブラムシがサルスベリに、サクラフシアブラムシがサクラに、ケヤキフシアブラムシがケヤキに発生した。多量の発生の際、防除はふ化幼虫をねらい、エカチン乳剤、エストックス乳剤などの1,000倍液を散布する。

カイガラムシ類：この害虫の種名同定は非常に難しい。一般に、介殻の中の卵で越冬し、4～6月にふ化する。ふ化直後の幼虫は薬剤によって簡単に死ぬため、防除はこの時期にジメトエート乳剤、スプラサイド乳

剤などの1,000倍液を2～3回散布する。介殻を作ったあとの防除は難しい。冬季に機械油乳剤を散布するのも効果的であるが、葉害が出やすく、使用基準を守る。

ワタフキカイガラムシ科のマツモグリカイガラムシが庭園木や盆栽に発生し、マツが枯れた例があった。オオワラジカイガラムシがコナラに、マツワラジカイガラムシがマツ類に、イセリアカイガラムシがトベラに発生した。フクロカイガラムシ科のサルスベリフクロカイガラムシがサルスベリに、コナカイガラムシ科のスギヒメコナカイガラムシがスギに発生した。カタカイガラムシ科のツノロウムシがカエデ類、カイドウなどに、カメノコロウムシがモチノキ、モッコク、ゲッケイジュなどに、ルビーロウムシがモチノキ、カイドウに、タマカタカイガラムシがサクラ、ウメに、ヒモワタカイガラムシがアメリカフウに発生した。フサカイガラムシ科のシイフサカイガラムシがシイ類に、ナラフサカイガラムシがコナラに、ニセタマカイガラムシ科のカシニセタマカイガラムシがシイ類に発生した。マルカイガラムシ科のスギマルカイガラムシがスギに、ビャクシンコノハカイガラムシがビャクシン、イヌマキ、ツバキなどに、マツカキカイガラムシがマツ類に、チャノマルカイガラムシがツツジに、クワシロカイガラムシがサクラ、ウメ、キリに発生した。

5. 球果および新梢害虫

(1) 鱗翅目

ハマキガ科：スギカサガがスギ球果を加害した。マツツアカシンムシ、メイガ科のモモノゴマダラノメイガ、マツノシンマダラメイガなどのしんくい虫が、若齢マツ類の新梢や球果を加害した。しかし、枯損に至った例はほとんどなかった。防除のため、被害を受けた新梢、球果は、すみやかに切り取り、焼却する。パイジット乳剤1,000倍液の予防散布も効果的である。

(2) 双翅目

タマバエ科：マツバノタマバエが異常発生し、アカマツ若齢林3haを枯らしたが、その後防除しなくても、3年後に終息した。

6. 根および樹皮害虫

(1) 直翅目

コオロギ科：コオロギがイチョウ苗木の樹皮を食害し、1,400本に被害を与えた。

(2) 鱗翅目

ヤガ科：ヨトウガ幼虫が、マツ、ヒノキ、プラタナス類の稚苗の地際部樹皮を食害し、枯死苗が生じた。防除は、ディブテレックス粉剤を、苗畑および周辺に散布する。

(3) 甲虫目

コガネムシ科：ヒメコガネ、マメコガネなどコガネムシ類の幼虫—ネキリムシ—が、苗畑に恒常的に発生した。多量に発生する時は、防除のためダイアジノン粒剤を、10aあたり5～10kg土壌にすきこむ。

(首席研究員兼部長 岸 洋一)